

意味のある作業を共有することで ADL の改善に繋がった一事例

○津餃子 (OT) ¹⁾・松阪牛子 (Dr) ¹⁾・鈴鹿一朗 (PT) ²⁾伊勢太郎 ²⁾

1) △△△病院 リハビリテーション科

2) △△△大学 △△△学部 リハビリテーション学科

キーワード：COPM，意欲，意味のある作業

【はじめに】今回，〇〇発症後に活動意欲が低下した患者に対して，COPM を用いた目標設定と介入を行った結果，活動の意欲が向上し，ADL の改善が見られたためその介入について報告する。なお，本報告は事例本人に書面を用いて説明し，同意を得ている。

【事例紹介】〇歳代男性．X年Y月Z日に〇〇発症により右片麻痺を呈し，ADL の低下および活動意欲の低下が見られていた．発症前は家庭内において，調理や掃除などの家事を担っていた。

【評価】介入開始時，BRS は上肢〇手指〇下肢〇であった．Barthel Index は〇/100 点，FIM は〇/126 点（運動項目〇点，認知項目〇点）であり，ADL の低下が見られていた．Vitality Index は〇/10 点であり，意欲の低下があった．COPM は，①料理をすることが重要度〇/10，遂行度〇/10，満足度〇/10，②掃除をすることが重要度〇/10，遂行度〇/10，満足度〇/10 であった。

【介入経過】

まずはじめに，COPM の結果を踏まえて，調理動作の再獲得，掃除動作の再開の 2 つの目標を設定し，事例と合意した．介入としては，環境調整や段階的な動作訓練を実施し，まずは座位や立位の訓練から開始し，次に実際の動作訓練へ移行していった．介入開始時はリハビリに消極的であったが，徐々に主体的に活動できる場面が増えていった。

【結果】

BRS は上肢〇手指〇下肢〇となり随意性が向上した．Barthel Index は〇/100 点，FIM は〇/126 点（運動項目〇点，認知項目〇点）となり，ADL が向上した．また，Vitality Index は〇/10 点となり，意欲が改善した。

【考察】心理機能の改善のためには意味のある作業に基づく介入が有効であると報告されている（著者名，西暦）．今回，COPM を用いて事例にとって意味のある作業を共有し，それに向けての訓練を行った結果，活動意欲の改善に繋がり，身体機能や ADL の改善にも繋がったと考えられる。